第12課　カイサリアでの監禁

【暗唱聖句】

「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」使徒26：29

【今週のテーマ】

パウロはカイサリアにおいてローマの法律に基づいて裁かれます。ローマ法にのっとれば、パウロが有罪となるような問題はどこにも見当たりませんでした。しかし、ローマから派遣された総督がユダヤ人たちから気に入られたいがために、問題が解決せず、ローマ皇帝にパウロが上訴せざるを得ない状況になっていきます。

【日曜日・フェリクスの前で】

パウロはカイサリアに移送された5日後に、大祭司アナニアは、長老数名と弁護士テルティロを連れてやってきて、総督フェリクスにパウロを訴え出ます。ローマの法律が適用される裁判ということで、弁護士を雇ったのでしょう。テルティロはまず総督に対して、十分な平和を享受し、いろいろな改革が進んでいるのは総督のおかげだと感謝を表します。実際には抑圧的かつ暴力的な統治のため、多くのユダヤ人たちが不満に思っていたのですが、同様のやり方でパウロにも対してもらいたいという気持ちが表れています。テルティロの主張は主に以下の3つでした。

1. パウロは帝国中で騒動を起こしていること。
2. パウロはナザレ派の分派の首謀者として危険であること。
3. パウロは神殿を汚したということ。

この訴えに対して、パウロはまずエルサレムに上ってからまだ十二日しかたっておらず、暴動を起こすような企てをする時間的余裕などないということ、そして暴動を扇動しているということを証言するものなどいないと言います。暴動を起こしているわけではないということがわかれば、もはや本来は裁判も成り立たないわけです。ナザレ派の分派であるとの訴えについては、確かにユダヤ教徒からみればそうなるのでしょう。ローマ帝国からユダヤ教は公認を受けていましたが、その分派となると問題だというわけです。しかし、最初の訴えと同様に騒動など起こしておらず、むしろ騒動を引き起こしているのはユダヤ教の指導者たちのほうなのです。しかも、クリスチャンたちが信じているのはユダヤ教徒と同じ先祖の神であり、旧約聖書の預言者の書を信じていることを弁明します。さらに復活を信じていることもパウロは付け加えます。復活に関してはファリサイ派も信じているわけで、ギリシャ人やローマ人たちには受け入れがたい教えですが、大きな罪に問えるものでもありませんでした。しかし、フェリクスはユダヤ人たちから気に入られたくて、審議は延期しパウロを2年間監禁することにしたのでした。

【月曜日・フェストゥスの前で】

2年間の監禁後、フェリクスに代わってフェストゥスが総督として60年から62年にかけて統治します。フェストゥスは着任して三日たってからエルサレムに上京します。するとユダヤ教の主だった人たちはパウロを訴え出て、彼をエルサレムへ送り返すよう計らっていただきたいと願い出ます。これは途中で殺そうと陰謀を企んでいたからでした。この訴えに対しては、パウロの裁判はカイサリアで行うというものでした。これはローマの法律で裁くことを意味していました。フェストゥスがカイサリアに戻ってきた翌日、すぐに法廷が開かれます。エルサレムから下って来たユダヤ人たちは重い罪状をあれこれ言い立てますが、結局それを立証することができません。しかし、フェストゥスはパウロに無罪判決を言い渡すことができたのに、ユダヤ人に気に入られようとしてパウロにエルサレムで裁判を行うことを認めるように促します。このような状況の中で、パウロはローマ市民権を利用して皇帝に上訴することになります。

【火曜日・アグリッパの前で】

ちょうどそのころ、ユダヤのアグリッパ王が総督を表敬訪問しに来ました。そこでフェリトゥスはパウロをどう扱ったら良いのかアグリッパ王に相談するのです。フェリトゥスはパウロが訴えられている問題は、ローマ法に照らしてみれば有罪にできるような罪状が何一つなく、ただユダヤ人の宗教に関することと、死んだはずのイエスが生きていると主張していることでもめているにすぎないと、きちんと理解していました。

　アグリッパ王もパウロに興味を示し、実際に会ってみたいと申し出ます。翌日、謁見室でアグリッパ王はパウロと会います。立派な盛装姿で現れたアグリッパ王と囚人として捕えられているパウロの姿は何とも対照的でした。しかし、神様の目に映る内側に輝く品性は外見とは全く反対でした。フェリトゥスは「彼が死罪に相当するようなことは何もしていないということが分かっているが、パウロが皇帝陛下に上訴したので困ったことになった。陛下に申し出るにはそれなりの罪状がないといけないと言うのでした。そして、アグリッパ王にどう思うかと意見を求めるのでした。

【水曜日・パウロの弁明】

パウロはアグリッパ王の前で弁明の機会が与えられます。結局パウロは自分の回心前と回心後について語ります。それはエルサレムにおいて語ったことを想起させるものでした。パウロの話は3つの部分に分けることができました。

1. ファリサイ人としてかつていかに信心深く生きてきたのかということ。
2. ダマスコへの途上でイエスに出会い回心し、異邦人への宣教使命が与えられたこと。
3. 天から示されたことに背かず、それを伝えたことによっていま裁かれていること。

パウロが熱心なファリサイ派であったことは、多くの人たちもよく知っているところでした。復活の教えも含めて彼の教えでユダヤ的でないものは基本的になく、それゆえ迫害されるのは筋違いでした。しかし実際にイエスが復活したとの主張に対して、多くのユダヤ人指導者たちはそれを素直に受け入れることができませんでした。かつてのパウロもそうだったのです。聖書を預言的教えが、目の前で実現していくとき、それを素直に認めることを難しく思うことが、わたしたちにもあるかもしれません。終わりの時代に起こる出来事に対しても、このことが言えるかもしれません。

【木曜日・指導者たちの前でのパウロ】

パウロの答弁に対して最初に反応したのはフェストゥスでした。彼は霊魂不滅は信じ、死者の復活は信じない立場にいました。復活という教えは愚かな教えに映ったのかもしれません。アグリッパ王はパウロに語ったことを理解することができました。しかし、パウロに対して肯定的なことを言えば、イエスをメシアと受け入れるしかなくなってしまいます。そこで「短い時間でわたしをキリスト信者にするつもりか」とだけ答えて、その場を逃れたのでした。このように大切な結論をうやむやにしたり、先延ばしにしたりする人の何と多いことでしょう。神様を信じていくとは、はっきりとした生き方が要求されるのです。